

サキュバスさんの
ご招待

基本8枚

差分46枚



頭が痛い…
ここはどこだ？

「お目覚めかしら？」

声が聞こえる…





「お腹がすいたからそのへんにいたあなたを
お屋敷に招待したの♡」

どうやら俺は誘拐されたらしい…
しかしこの子は一体何を言っているんだ



「別にとって食おうってわけじゃないから
安心して頂戴」

「ただちょっと精力を分けてくれれば
それでいいから」

「…は？」

本気で何を言ってるのかわからない…

よく見れば格好も変だし
ちよつと頭がアレな子なんだろうか





「私に任せてくれればいいから
付き合ってください」

…どうやら拒否権はないらしい

あれよあれよという間に服を脱がされ
のしかかられてしまった



「ホラ気持ちいいでしょ？」

呼びかけられているがあまりに急なことに
頭が追い付かない



「…受け答えぐらいしてくれたって
いいんじゃない」
そう言うとな彼女はより太ももに
力を入れてきた





そういうと一層力を込めてきた

「あらっ、やっと反応
してくれた♥」

気持ちよすぎてもう出そうだ…
「もっ、もうやめてくれっ」



太ももからの強烈な刺激に
耐えきれず射精してしまった

「うっもう無理だ
出るっ……！」



「うふふっ元気そうで嬉しいわあ」

あっさり射精させられた上に
笑われてしまった…



「精力が欲しいってこれで
満足なのか…?」

「何を言っているの?」
この程度じゃ何の足しにもならないわ」

どうやらまだまだ解放されないらしい

「とっ、とりあえず休ませてくれ…」
しかし気が付くと今度は胸が押し付けられていた

「1発程度で休みなんているわけないでしょ」



「ホラっこんなに元気じゃない」

下半身は素直なもので会館には逆らえず
あっという間にギンギンになってしまった



「こんなに元気なのに休みたいなんて言う
悪い子はお仕置きが必要ね」

そういうとさらに強く、早く胸を押し付けてきた



「ホラホラ早く出しちゃいなさいよ」

煽るように言われるが実際もう限界だ…
「もう出るっ……!」





「んっ美味しい…」
彼女は夢中で精液を吸っていた

「この程度じゃ足りないわ
もっと飲ませて頂戴」



しかし流石に2連発した後
になると息子は元気がない



「んっ…」

しかし元気のなかった息子も
口撃により強制的に元気にされてしまった



「もう無理っ！」
元気を取り戻したはいがあっ　いう間に
達しそうになる



「ああ出るっ！」
我慢などできずあつという間に搾り取られてしまった



「んっ、やっぱり美味しいわね」

これで満足していただけたんだらうか…？





「さあ休んでないで次よ」

…全く満足してないらしい

「本当にもう無理だって！」
もはや刺激が快感から痛みに変わってきている

「この程度で根を上げるなんて本当に
情けないわね」



「ホラッそんなこと言いながらも出そうじゃない」

もはや痛いのか気持ちいいのか訳がわからない



「うふっ、まだまだ元気じゃない」

痛みが走るがそれでも射精してしまった



「それじゃあそろそろ私も気持ちよくして
もらおうかしら」



「メインデッシュの時間よ」
そう言っていると彼女はのしかかってきた



痛みがあるが強制的に挿入されると強烈な快感に襲われる

「んっ中々根性があるじゃない♡」



「あなたも気持ちよさそうで何よりだわ♡
そう言うと一方的に腰を動かしてくる



「ああイクッ！」
耐え切れずに射精してしまった



「んっ、中々気持ち良かったわ」

…満足してもらえたみたいだ
しかし痛みもあるのにまだやりたくてたまらない

ド
ン
ビ
ン

「あら、あなたまだ満足できてないのね」



「ふふっ、したいなら満足いくまで付き合っ
てあげるわよ」
こちらから動くのを待っている…



もう限界だった
がそれでも我慢は
できず挿入して
しまった



「やっと素直になってくれて嬉しいわ♡」

ん♡

ズン

ズン

ズン

痛みを上回る強烈な快感のせいで
腰が止まらない



「ぐうつ、また出るっ」

「ふふっ全部出して頂戴」

ドゥッ
〜
ドゥッ
〜



「ふふったくさん出た♡」



て
ろ
ろ

「んっ、まだ1発くらいはいけそうね」

そう言われた瞬間気がつけば挿入していた





「はあっはあっ」
体が音を上げるが腰は止まらない



「ああ出るっ！全部出る！」

「全部出してちょうだい♡」

ヒクッ

ドクッ

ドクッ



出した瞬間完全に体から力が抜けてしまった

「ふふっよく頑張ったわね」

…もはや何を言ってるのかも聞き取れない

ド
ロ
ッ



「御馳走さま満足できたわ♥」

どうやら満足していただけたらしい
しかし力が入らない…

「お腹がすいたらまたよろしくね♡」

そんな声が聞こえた気がするが
そこで意識を手放した





























































































